

マンドラゴラ異聞

泉 彪之助

日本医史学雑誌第四十五巻第四号
平成十一年十二月二十日発行

平成十一年九月十六日受付

私は華岡青洲研究には無縁の人間だが、諸先生の熱心な探究ぶりに刺激を受けて、読書の際、それとなく気をつけるようになった。以下はそうした中で出会った、有名な古典に書かれたマンドラゴラ(マンダラゲ)⁽¹⁾、有名な著者が書いた「マンドラゴラ」という戯曲⁽²⁾である。

ちなみにこの小論の題は、作家平岩弓枝氏の「ミステリー・シリーズ「御宿かわせみ」の一編「まんどらごら奇聞」⁽³⁾」を一字変更して借用した。

一. ヨセフス『ユダヤ戦記』のマンドラゴラ

ディオスコリデスに関する本を読んでいたら、ヨセフスの『ユダヤ戦記』にマンドラゴラの記載があると書かれています⁽⁴⁾、調べて見た。『ユダヤ戦記』は、日本ではあまり一般的でないが、ヨーロッパでは重要な古典のひとつである。ローマ帝国にもっとも果敢な抵抗を行ったのは、イベリア半島とユダヤであった。ユダヤの抵抗は、第一次、第二次のユダヤ戦争となり、いずれもユダヤ側が敗北して、その結果ユダヤ人はパレスチナに住むことを禁じられ、祖国のない民となった。第一次ユダヤ戦争の状況を書いたのが『ユダヤ戦記』である。著者フラウイウス・ヨセフス (Flavius Josephus)⁽⁵⁾⁽⁶⁾⁽⁷⁾ (紀元三七、八年(一)一〇〇年以後は、もとユダヤ軍の将軍であったが、捕虜となった後にローマ軍の一

員となり、その立場でユダヤ戦争の経過を記録した。フラウイウスは名でなく、ローマ皇帝ウエスパシアヌスから、その氏族名を名乗ることを許されたものである。経歴だけ聞くと単なる変節者のように見えるが、『ユダヤ戦記』に書かれているように、ユダヤ人の中で主戦派と穏健派のきびしい対立があり、流血の惨事が起こっている。ヨセフスは穏健派であったが、やむなく戦争に加わり、捕虜となった後はユダヤ民族の復興のために力を尽くした。

右のような経歴から、ヨセフスは第一次ユダヤ戦争のかけがえのない証言者となった。さいわい我国でも『ユダヤ戦記』の全訳が出版されており、ギリシヤ語で書かれたこの書を日本語で読むことができる。ヨセフスには『ユダヤ古代誌』などの著作もあり、『ユダヤ戦記』訳書の出版社から全一六巻の邦訳全集が発行されている。

ヨセフスは、最初『ユダヤ戦記』をユダヤ人の日常語であったアラム語で書いたが、あまり読まれなためギリシヤ人の助けをかりてギリシヤ語に訳し、それが普及した。⁽⁶⁾ 現在残っている『ユダヤ戦記』は、ギリシヤ語のものだけである。執筆したのはウエスパシアヌス皇帝治下の紀元七五年から七九年の間とされるが、マンドラゴラが書かれている第七巻は、もつと後のドミティアヌス帝治下（紀元八一年―九六年）の終わりごろという説が出ている⁽⁷⁾。

本題にもどって、マンドラゴラの記載は『ユダヤ戦記』最終巻の第七巻にある。この巻は、第一次ユダヤ戦争最後の砦となりユダヤ軍の戦闘員全員が自決した、マサダの悲劇を描いている点で重要な巻だが、マサダとは別の場所の、戦争の末期にローマ軍が進攻した土地の地誌という形で書かれている。訳をそのまま引用する。

「町〔引用者注：死海の東の北端にあるマカイロス〕を囲む北側の溪谷にバアラスという場所があり、ここでは同名のバアラス（注：写本によってはバアル、ブラバス）と呼ばれる根茎が成育している。その色は燃えあがる炎のような色で、夕方に明るい光を発する。引き抜こうとして近づいて触れようとするとその手を避け、婦人の小水や月のものをふりかけると静止する。しかし、そのときでも、直接手でさわるのはきわめて危険で命にかかわる。そこで触れないように充分注意して根を引き抜かなければならない。危険を避けるもう一つの採集方法は次のようなものである。まず、周囲の土を



写真：Euresis(発見)という名の女性もつマンガラゲを指さすディオスコリデス。傍らに死んだ犬がある。古い原画の、十五世紀に作成された模写(文献(4)より引用)

患部にあてるとそうしただけで、悪鬼(ダイモニア)と呼ばれるものーそれが邪悪なものたちの霊(ブネウマ)で、生きている者「の肉体」に入り込み、手当しなければ死ぬーがたちどころに追い出されるからである⁽¹⁾。

このバアラスがヘブライ語でマンガラゲのことだといふので、ヘブライ語の辞書を見たが、初心者用の辞書には出ていなかった。ただバールは荒野という意味らしく、それと関係があるかもしれない。犬が引き抜くと死ぬといふことは有名になって、そのことを示した絵がある(写真⁽⁴⁾)。この絵をめぐってのいろいろな議論ーたとえばこの絵に描かれているのはディオスコリデスではなくCrataeasで、ヨセフスの記載はオリジナルでなく別の史料を引用したのではないかという説などーについては原文献を参照されたい。⁽⁴⁾

二、マキアヴェッリ作の喜劇「マンドラーゴラ」⁽²⁾

ニコロ・マキアヴェッリ(一四六九ー一六五七)は、いうまでもなく『君主論』の著者⁽⁸⁾⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾である。

全部掘り起こし、根のわずかの部分だけが土でおおわれている状態にする。そして犬をそれに縛りつけると、犬が縛りつけた者を追いかけてようと飛び出そうとするが、その瞬間、根は簡単に引き抜ける。しかし犬はそれを引き抜こうとした者の身代わりになったかのように即死する。「二度引き抜けば」手で扱っても安全である。この植物はこのように危険きわまりないものにもかかわらず、人びとに珍重される治癒力が認められている。すなわちこの根を病人の

マキアヴェツリはフィレンツェ共和国の役人として活躍したが、支配者の交代でクビになり文筆家になった。『君主論』をはじめとする政治哲学の著作の他に、『フィレンツェ史』などの著書がある。マキアヴェツリは晩年また役人的活動にもどるが、常勤の地位にはつげず、活動それ自身もあまり成功しなかったようである。

「マンドラーゴラ」は文筆家としてのマキアヴェツリが書いた戯曲で、ストーリーは次の通りである。

ある男が、美人の人妻によからぬ欲望を抱く。正攻法では思いをとげられないというので一計を案じ、パリ帰りの偽医者になりすまして子供のいない夫婦に「子供ができる方法を教える」という。「マンドラーゴラが入った薬を飲むと必ず子供ができるが、この薬を飲んだ女性と最初に交わった男は命を落とす。夫がその危険を避けるには、だれかを連れて来て、妻が薬を飲んだ後にまずその男と交わらせなければならぬ」。夫はいやがる妻を説得してそのことを承知させ、男は偽医者と浮浪者の両方になりすまして思いをとげるといふ筋である。

たわいもない戯曲のように思われるが、イタリア文学の傑作の一つとして現在も上演されている。⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾ 塩野七生氏によれば「はじめてイタリア喜劇を見た、とまでゲーテを賛嘆させたゴルドーニのものより出来がよく、劣るとすれば、コルネーユの最良の作に対してのみ、といわれるルネサンス喜劇の傑作」である。同氏は、この戯曲成立周辺の事情や内容を詳しく書いており、関心のある方は参照していただきたい。⁽¹⁰⁾

文学的評価はよく分らないが、私は二つの点で興味深く感じた。ひとつは、マンドラーゴラがすばらしい効果をもつ薬として偽計の種にされていることである。先の平岩弓枝氏の小説のストーリーは省略したが、幕末に外国船がもつてくるマンドラーゴラを蘭方医がほしがるので、盗み出して売りさばくのが出てきてそれから・・・というような筋であった。⁽³⁾ マキアヴェツリにしても平岩氏にしても、マンドラーゴラの効果の高さが、このようなストーリーを生んだのであろう。

もう一つは、マンドラーゴラが卓越した効果を示すが、最初の段階で命を落とす危険があり、それを避けるためには身代わりをたてなければならぬという内容である。先のヨセフスの犬と、この戯曲の身代わり男とは重なってくるので

はないだろうか。『ユダヤ戦記』ギリシャ語原本が印刷刊行されたのは一五四四年で「マンドラーゴラ」執筆の後だが、ラテン訳の印刷本はそれより先に刊行されていた⁽⁵⁾というので、ギリシャ語ができなかつたマキアヴェッリも、『ユダヤ戦記』を読んでいた可能性⁽¹⁾がある。

有吉佐和子氏が『華岡青洲の妻』⁽¹⁾を書いたとき、ヨセフスを読んでいたかあるいは意識していたかは知らない。しかし有吉氏の作品では、家族が単なる身代わりでなく、嫁姑の関係が基礎にあるにせよ意識した自己犠牲として研究に参加している。有吉氏の場合は、ヨセフスと離れたものと考えてよいであろう。

文 献

- (1) フラウィウス・ヨセフス著、秦剛平訳『ユダヤ戦記3』、二二〇頁および解説、山本書店、東京、一九九六年
- (2) マキアヴェッリ著、脇巧訳「マンドラーゴラ」『マキアヴェッリ全集4』、四〇五～四四頁、筑摩書房、東京、一九九九年
- (3) 平岩弓枝「まんどらごら奇聞」『かくれんぼ、御宿かわせみ一九』、文芸春秋社、東京、一九九四年、文春文庫、一九九七年
- (4) Riddle, J. M.: *Dioscorides on Pharmacy and Medicine*, 87 & 189pp. University of Texas Press, Austin, 1985
- (5) フラウィウス・ヨセフス著、新見宏訳『ユダヤ戦記1』(解説)、山本書店、東京、一九七五年
- (6) ミレーユ・アダスルルベル著、東丸恭子訳『フラウィウス・ヨセフス伝』、白水社、東京、一九九三年
- (7) 'Josephus, Flavius', *The New Encyclopaedia Britannica* 6, 623, 624pp. The Encyclopaedia Britannica Inc., Chicago, 1992
- (8) マキアヴェッリ著、池田廉訳『君主論』、中公文庫、東京、一九七七年
- (9) 佐々木毅『マキアヴェッリと「君主論」』、講談社学術文庫、東京、一九九九年
- (10) 塩野七生『わが友マキアヴェッリ』、中央公論社、東京、一九八七年
- (11) 有吉佐和子『華岡青洲の妻』、新潮文庫、東京、一九九七年 (老人保健施設 陽翠の里)